

ベルリン新博物館「エジプトの中庭」および「ローマの間」装飾壁画の造形的再解釈

三井 麻央（岡山大学）

1855年プロイセン王国の首都ベルリンに開館した新博物館では、展示室「エジプトの中庭」、「ギリシャの間」、「ローマの間」において、古代の著名な建築を伴う風景画が装飾として描かれた。新博物館の建築および装飾を考案した建築家アウグスト・シュテューラー（1800-1865）は、自身の著作『新博物館』（1853）の中で、この3室に描かれた古代建築が「忠実（treu）」な「復元（Restauration）」に基づくと述べている。ミンケルスの研究（2011）はこれらの古代建築と施主である国王との関係性を示したが、シュテューラーの記述の内実と意図を踏まえた造形的側面からの考察はこれまでほとんどなされてこなかった。よって本発表は、本作を造形的に再解釈することでシュテューラーの意図を明らかにし、ひいては19世紀半ばのベルリンにおける古代観および装飾観の一端を示すことを目的とする。

本発表で第一に指摘するのは、「エジプトの中庭」および「ローマの間」壁画の造形的特徴が、18世紀のヴェドゥータなど建築を伴う従来の風景画とは異なっており、その由来をまずは制作を担当した画家たちに求められることである。壁画制作を担当したエドゥアルト・ピアーマン（1803-1892）ら6名は、当時プロイセンで「建築画家」と呼ばれた画家であった。壁画には彼らの多くが所属したベルリン王立磁器製陶所（KPM）での図案制作や、かつてベルリンで栄えたパノラマおよび舞台背景画の制作を通して培った、建造物の細部を精緻に描き出す手法が用いられる。その一方で、彼らの描いた古代建築は、必ずしも再現描写によるリアリズムを目指してはいない。描かれた古代建築は、19世紀時点で残存していたオリジナルの記録でもなければ、廃墟による理想的な古代風景の描出でもなく、欠損のない完全な形態で示される。さらに「ローマの間」壁画のうち1点には今なお発見されず記録上のみ残る小プリニウスのヴィラの一部が見出されるが、これは建築家フリードリヒ・シンケル（1781-1841）による復元図を転用したものにはほかならない。本発表で第二に指摘するのは、これら古代建築の細部描写には建築家らの調査研究が大きな役割を担っていたことである。

つまり「忠実な復元」によるこれらの建築画は、画家と建築家双方の寄与により成り立っていた。壁面装飾として過去の状態を甦らせることでシュテューラーが意図したのは、展示物に精彩を与え、展示空間に各時代の雰囲気をもたらすことであった。ここでの復元とは、18世紀のポンペイ発掘などによって掻き立てられた、ポリクロミー建築に特徴的な古代ローマ受容の一端といえる。しかし装飾壁画と文様によって建造物を覆うことで歴史的イメージを喚起させる一連の行為自体が、ヴィンケルマンに由来する白い大理石を至高のものにとらえたギリシャ派とは異なる、もうひとつの古代観によってもたらされた装飾観とその実用化の一例を示しているのだといえよう。